

基本計画書

基本計画書										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	研究科の専攻の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン トウキョウノウギョウダイガク 学校法人東京農業大学									
フリガナ大学の名称	トウキョウノウギョウダイガクダイガクイン 東京農業大学大学院									
大学本部の位置	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号									
大学の目的	本大学は、その伝統及び私立大学の特性を活かしつつ、教育基本法に則り、生命科学、環境科学、情報科学、生物産業学等を含む広義の農学の理論及び応用を教授し、有能な人材を育成すると共に、前記の学術分野に関する研究及び研究者の養成をなすことを使命とする。									
新設学部等の目的	植物、昆虫、動物から構成される生態系を保全・管理するとともに、それら生物資源の機能性を利活用することを目的としている。生態系の多様性、種の多様性、遺伝子（種内）の多様性を含む生物多様性について、形態、分類、生理、生態、行動、進化などの基礎生物学的視点と、飼育・繁殖、栽培、育種などの農学的視点で複合的に考究する。このような生物資源開発学的アプローチにより、諸問題の課題を解決するための科学的解析能力、論理的展開能力を備える人材を養成する。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	農学研究科 [Graduate School of Agriculture] 生物資源開発学専攻 (M) [Department of Bioresource Development] 計	年	人	年次人	人	修士(農学) 【Master of Agricultural Science】	令和4年4月 第 年次	神奈川県厚木市船子 1737番地		
		—	10	—	20	—	—	—		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	東京農業大学大学院 農学研究科 デザイン農学専攻 (M) (8) (令和3年4月届出)									
	東京農業大学大学院 農学研究科 バイオセラピー学専攻 (M) (廃止) (△10) ※令和4年4月学生募集停止 令和4年4月名称変更 東京農業大学大学院 生物産業学研究科 生物生産学専攻 (M) → 北方圏農学専攻 (M) アクアバイオ学専攻 (M) → 海洋水産学専攻 (M) 食品香料学専攻 (M) → 食香料化学専攻 (M) 産業経営学専攻 (M) → 自然資源経営学専攻 (M)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	生物資源開発学専攻 (M)	講義	演習	実験・実習	計	30 単位				
		10 科目	5 科目	5 科目	20 科目					
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等						兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設	農学研究科	8 (8)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	9 (9)	0 (0)	1 (1)	
		生物資源開発学専攻 (M)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	3 (3)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	
		デザイン農学専攻 (M)	14 (14)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	21 (21)	0 (0)	2 (2)	
	既設	農学研究科	10 (10)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	3 (3)	
		農学専攻 (M)	8 (8)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	4 (4)	
動物科学専攻 (M)		10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	1 (1)		
	応用生物科学研究科	10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	1 (1)		
	農芸化学専攻 (M)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	3 (3)		

教 員 組 織 の 概 要	既 設	醸造学専攻 (M)	6 (6)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	13 (13)	0 (0)	1 (1)		
		食品安全健康学専攻 (M)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)		
		食品栄養学専攻 (M)	9 (9)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	3 (4)		
		生命科学研究所 バイオサイエンス専攻 (M)	9 (9)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	9 (9)		
		分子生命化学専攻 (M)	4 (4)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	0 (0)	2 (2)		
		分子微生物学専攻 (M)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	2 (2)		
		地域環境科学研究科 林学専攻 (M)	8 (8)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	1 (1)		
		農業工学専攻 (M)	12 (12)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	16 (16)	0 (0)	2 (2)		
		造園学専攻 (M)	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	1 (1)		
		地域創成科学専攻 (M)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	1 (1)		
		国際食料農業科学研究科 国際農業開発学専攻 (M)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	8 (8)		
		農業経済学専攻 (M)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	6 (6)		
		国際アグリビジネス学専攻 (M)	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	4 (4)		
		国際食農科学専攻 (M)	6 (6)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	4 (4)		
		生物産業学研究科 北方圏農学専攻 (M)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	1 (1)		
		海洋水産学専攻 (M)	5 (5)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)		
		食香粧化学専攻 (M)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)		
		自然資源経営学専攻 (M)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	1 (1)		
			計	171 (171)	81 (81)	0 (0)	5 (5)	257 (257)	0 (0)	58 (61)	
			合 計	185 (185)	84 (84)	0 (0)	9 (9)	278 (278)	0 (0)	60 (63)	
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計				
	事 務 職 員		149人 (149人)		11人 (11人)		160人 (160人)				
	技 術 職 員		22人 (22人)		6人 (6人)		28人 (28人)				
	図 書 館 専 門 職 員		5人 (5人)		1人 (1人)		6人 (6人)				
	そ の 他 の 職 員		0人 (0人)		7人 (7人)		7人 (7人)				
計		176人 (176人)		25人 (25人)		201人 (201人)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		東京農業大学第一高等学校(収容定員975人、面積基準 運動場8,400㎡)、中等部(収容定員525人、面積基準 運動場6,450㎡)と共用 借用面積： 3,570.24㎡ 借用期間：60年			
	校 舎 敷 地	354,079.78㎡	0㎡	15,350.76㎡		369,430.54㎡					
	運 動 場 用 地	31,147.98㎡	30,935.81㎡	6,453.99㎡		68,537.78㎡					
	小 計	385,227.76㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡		437,968.32㎡					
	そ の 他	2,662,651.56㎡	0㎡	0㎡		2,662,651.56㎡					
合 計	3,047,879.32㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡		3,100,619.88㎡						
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		大学全体				
	220,052.04㎡ (216,567.88㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)		220,052.04㎡ (216,567.88㎡)						
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体				
	101室	81室	718室	8室 (補助職員2人)	0室 (補助職員0人)						
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数		申請専攻全体					
	生物資源開発学専攻 (M)			17 室							

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	○標本 学部単位での特 定不能のため、 大学全体の数 ○大学全体での 共用図書 325, 895〔36, 573 〕 ○学術雑誌・視 聴覚資料は大学 全体の数		
	生物資源開発学専攻 (M)	240, 628〔43, 637〕 (232, 413〔42, 678〕)	18, 226〔10, 369〕 (18, 226〔10, 369〕)	8, 388〔8, 179〕 (8, 388〔8, 179〕)	7, 892 (7, 733)	74 (74)	33, 778 (33, 778)			
	計	240, 628〔43, 637〕 (232, 413〔42, 678〕)	18, 226〔10, 369〕 (18, 226〔10, 369〕)	8, 388〔8, 179〕 (8, 388〔8, 179〕)	7, 892 (7, 733)	74 (74)	33, 778 (33, 778)			
図書館		面積		閲覧座席数		収納可能冊数		大学全体		
		8, 026. 19㎡		1, 383		1, 162, 000				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		10, 371. 27㎡		野球場 2 面 テニスコート 4 面						
経費の見積り 及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	教員1人当り研究費等		391千円	391千円						
	共同研究費等		5, 598千円	5, 598千円						
	図書購入費	239千円	332千円	332千円						
	設備購入費	3, 343千円	2, 171千円	2, 171千円						
学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1, 460. 6千円	1, 240. 6千円	一千円	一千円	一千円	一千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金収入、寄付金収入、手数料収入等							
既設大学等の 状況	大学の名称	東京農業大学大学院								
	学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所在地	
	農学研究科 博士前期課程	年	人	年次 人	人		倍			
	農学専攻	2	14	—	28	修士 (農学)	1. 10	昭和28年度	神奈川県厚木市船子 1737番地	
	畜産学専攻	2	12	—	24	修士 (畜産 学)	1. 08	昭和61年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	2	10	—	20	修士 (バイオ セラピー学)	0. 95	平成22年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	2	—	—	—	修士 (バイオ サイエンス)	—	平成14年度	東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号	令和3年4月学生募 集停止
	農芸化学専攻	2	—	—	—	修士 (農芸化 学)	—	昭和32年度	同上	令和2年4月学生募 集停止
	醸造学専攻	2	—	—	—	修士 (醸造 学)	—	平成2年度	同上	令和2年4月学生募 集停止
	食品栄養学専攻	2	—	—	—	修士 (食品栄 養学)	—	昭和61年度	同上	令和2年4月学生募 集停止
	林学専攻	2	—	—	—	修士 (林学)	—	昭和61年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	農業工学専攻	2	—	—	—	修士 (農業工 学)	—	平成2年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	造園学専攻	2	—	—	—	修士 (造園 学)	—	平成2年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	国際農業開発学専攻	2	—	—	—	修士 (国際農 業開発学)	—	平成2年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	農業経済学専攻	2	—	—	—	修士 (農業経 済学)	—	昭和28年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	国際バイオビジネス学専攻	2	—	—	—	修士 (国際バ イオビジネス 学)	—	平成14年度	同上	令和3年4月学生募 集停止
	修士課程									
	食品安全健康学専攻	2	—	—	—	修士 (食品安 全健康学)	—	平成30年度	同上	令和2年4月学生募 集停止
	農学研究科 博士後期課程						0. 49			
	農学専攻	3	5	—	15	博士 (農学)	0. 26	昭和37年度	神奈川県厚木市船子 1737番地	
畜産学専攻	3	4	—	12	博士 (畜産 学)	0. 50	平成2年度	同上		
バイオセラピー学専攻	3	3	—	9	博士 (バイオ セラピー学)	0. 66	平成24年度	同上		
バイオサイエンス専攻	3	6	—	18	博士 (バイオ サイエンス)	—	平成16年度	東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号	令和3年4月学生募 集停止	
農芸化学専攻	3	—	—	—	博士 (農芸化 学)	—	昭和34年度	同上	令和2年4月学生募 集停止	
醸造学専攻	3	—	—	—	博士 (醸造 学)	—	平成14年度	同上	令和2年4月学生募 集停止	

既設大学等の状況	食品栄養学専攻	3	—	—	—	博士（食品栄養学）	—	平成14年度	同上	令和2年4月学生募集停止	
	林学専攻	3	—	—	—	博士（林学）	—	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	農業工学専攻	3	—	—	—	博士（農業工学）	—	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	造園学専攻	3	—	—	—	博士（造園学）	—	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	国際農業開発学専攻	3	—	—	—	博士（国際農業開発学）	—	平成14年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	農業経済学専攻	3	—	—	—	博士（農業経済学）	—	昭和37年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	国際バイオビジネス学専攻	3	—	—	—	博士（国際バイオビジネス学）	—	平成16年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	環境共生学専攻	3	—	—	—	博士（環境共生学）	—	平成2年度	同上	令和3年4月学生募集停止	
	応用生物科学研究科 博士前期課程							0.95			
	農芸化学専攻	2	30	—	30	修士（農学）	1.01	令和2年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号		
	醸造学専攻	2	20	—	20	修士（農学）	1.05	令和2年度	同上		
	食品安全健康学専攻	2	20	—	20	修士（農学）	0.77	令和2年度	同上		
	食品栄養学専攻	2	6	—	6	修士（農学）	0.99	令和2年度	同上		
	応用生物科学研究科 博士後期課程							0.33			
	農芸化学専攻	3	5	—	5	博士（農学）	0.30	令和2年度	同上		
	醸造学専攻	3	2	—	2	博士（農学）	0.25	令和2年度	同上		
	食品安全健康学専攻	3	3	—	3	博士（農学）	0.33	令和2年度	同上		
	食品栄養学専攻	3	2	—	2	博士（農学）	0.50	令和2年度	同上		
	生命科学研究所 博士前期課程							0.00			
	バイオサイエンス専攻	2	30	—	60	修士（農学）	0.00	令和3年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号		
	生命科学研究所 博士後期課程							2.07			
	バイオサイエンス専攻	3	5	—	15	博士（農学）	1.93	令和3年度	同上		
	修士課程 分子生命化学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	2.10	令和3年度	同上		
	分子微生物学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	2.25	令和3年度	同上		
	地域環境科学研究科 博士前期課程							1.18			
	林学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	1.00	令和3年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号		
	農業工学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	1.00	令和3年度	同上		
	造園学専攻	2	10	—	20	修士（農学）	1.40	令和3年度	同上		
	修士課程 地域創成科学専攻	2	6	—	12	修士（農学）	1.33	令和3年度	同上		
	地域環境科学研究科 博士後期課程							0.50			
	林学専攻	3	8	—	24	博士（農学）	0.25	令和3年度	同上		
	農業工学専攻	3	8	—	24	博士（農学）	0.50	令和3年度	同上		
造園学専攻	3	10	—	30	博士（農学）	0.00	令和3年度	同上			

既設大学等の状況	国際食料農業科学研究科 博士前期課程						0.74				
	国際農業開発学専攻	2	18	—	36	修士（農学）	0.61	令和3年度	東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号		
	農業経済学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	0.62	令和3年度	同上		
	国際アグリビジネス学専攻	2	10	—	20	修士（農学）	0.60	令和3年度	同上		
	修士課程 国際食農科学専攻	2	7	—	14	修士（農学）	1.42	令和3年度	同上		
	国際食料農業科学研究科 博士後期課程						1.33				
	国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	1.25	令和3年度	同上		
	農業経済学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.25	令和3年度	同上		
	国際アグリビジネス学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.50	令和3年度	同上		
	生物産業学研究科 博士前期課程						1.12				
	生物生産学専攻	2	7	—	14	修士（生物産業学）	1.13	平成22年度	北海道網走市八坂196番地		
	アควアバイオ学専攻	2	5	—	10	修士（生物産業学）	1.10	平成22年度	同上		
	食品香粧学専攻	2	5	—	10	修士（生物産業学）	1.50	平成22年度	同上		
	産業経営学専攻	2	3	—	6	修士（経営学）	0.49	平成22年度	同上		
生物産業学研究科 博士後期課程						0.66					
生物産業学専攻	3	8	—	24	博士（生物産業学又は経営学）	0.66	平成7年度	同上			
既設大学等の状況	大学の名称	東京農業大学									
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
		年	人	年次人	人		倍				
	農学部						1.03		神奈川県厚木市船子 1737番地		
	農学科	4	170	—	730	学士（農学）	1.03	昭和24年度	同上		
	動物科学科	4	140	—	600	学士（農学）	1.04	昭和24年度	同上		
	生物資源開発学科	4	125	—	375	学士（農学）	1.04	平成30年度	同上		
	デザイン農学科	4	123	—	369	学士（農学）	1.01	平成30年度	同上		
	バイオセラピー学科	4	—	—	—	学士（農学）	—	平成18年度	同上		平成30年度4月学生募集停止
	応用生物科学部						1.04		東京都世田谷区桜丘 1丁目1番地1号		
	農芸化学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.03	平成10年度	同上		
	醸造科学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.05	平成10年度	同上		
	食品安全健康学科	4	150	—	590	学士（応用生物科学）	1.04	平成26年度	同上		
	栄養科学科	4	120	—	480	学士（応用生物科学）	1.04	平成10年度	同上		
	生命科学部						1.04				
バイオサイエンス学科	4	150	—	590	学士（農学）	1.04	平成29年度	同上			
分子生命化学科	4	130	—	505	学士（農学）	1.02	平成29年度	同上			
分子微生物学科	4	130	—	505	学士（農学）	1.06	平成29年度	同上			

既設大学等の状況	地域環境科学部						1.03					
	森林総合科学科	4	130	—	510	学士(地域環境科学)	1.03	平成10年度	同上			
	生産環境工学科	4	130	—	510	学士(地域環境科学)	1.02	平成10年度	同上			
	造園科学科	4	130	—	510	学士(地域環境科学)	1.03	平成10年度	同上			
	地域創成科学科	4	100	—	380	学士(農学)	1.05	平成29年度	同上			
	国際食料情報学部						1.03					
	国際農業開発学科	4	150	—	590	学士(国際食料情報学)	1.02	平成10年度	同上			
	食料環境経済学科	4	190	—	750	学士(国際食料情報学)	1.03	平成10年度	同上			
	国際バイオビジネス学科	4	150	—	590	学士(国際食料情報学)	1.03	平成10年度	同上			
	国際食農科学科	4	110	—	430	学士(農学)	1.04	平成29年度	同上			
	生物産業学部						1.02			北海道網走市八坂196番地		
	北方園農学科	4	91	—	401	学士(農学)	1.02	平成元年度	同上			令和2年度入学定員減(▲9) 令和2年度編入学定員減(▲10)
海洋水産学科	4	91	—	331	学士(農学)	1.06	平成18年度	同上			令和2年度入学定員増(11名)	
食香粧化学科	4	91	—	343	学士(農学)	0.97	平成元年度	同上			令和2年度入学定員増(11名) 令和2年度編入学定員減(▲12)	
自然資源経営学科	4	90	—	365	学士(経営学)	1.03	平成元年度	同上			令和2年度編入学定員減(▲5)	
既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学大学院										
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地			
	総合情報学研究科 博士前期課程	年	人	年次人	人		0.53		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地			
	総合情報学専攻	2	15	—	30	修士(総合情報学)	0.53	平成4年度	同上			
	総合情報学研究科 博士後期課程						0.11					
総合情報学専攻	3	3	—	9	博士(総合情報学)	0.11	平成11年度	同上				
既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学										
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地			
	総合情報学部						1.16		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地			
	総合情報学科	4	400	3年次10	1,620	学士(総合情報学)	1.16	平成25年度	同上			
	看護学部						0.87		同上			
看護学科	4	100	—	400	学士(看護学)	0.87	平成29年度	同上				

	名称	目的	設置年月
附属施設の概要	1 図書館 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学生の学習・研究活動の支援施設	平成26年4月
	農学部図書館 (神奈川県厚木市船子1737)	学生の学習・研究活動の支援施設	平成10年4月
	生物産業学部図書館 (北海道網走市八坂196)	学生の学習・研究活動の支援施設	平成元年4月
	2 農学部の附属施設		
	伊勢原農場 (神奈川県伊勢原市三ノ宮前畑)	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習 1499-1 他 (79, 910, 22㎡)	平成24年4月
	富士農場 (静岡県富士宮市麓422)	畜産実習を中心とした実習教育 (323, 260. 00㎡)	昭和17年
	植物園 (神奈川県厚木市船子1737)	有用植物の収集・保存・展示	昭和22年
	生き物連携センター (神奈川県厚木市船子1737)	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究	平成19年4月
	電子顕微鏡室 (神奈川県厚木市船子1737)	ウイルス・微生物等の微細構造解析	平成10年4月
	3 応用生物科学部の附属施設		
	食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成10年4月
	4 生命科学部の附属施設		
	高次生命機能解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	遺伝子組換え、栄養、生理、遺伝、 発生など生命科学分野の研究	平成21年4月
	5 地域環境科学部の附属施設		
	奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137)	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等 (653, 016. 00㎡)	昭和53年
	6 国際食料情報学部の附属施設		
	宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2)	熱帯農業の実習教育・試験研究 (98, 262. 00㎡)	昭和63年
	7 生物産業学部の附属施設		
	網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8)	寒冷地大規模農場の実習教育 (432, 174. 00㎡)	昭和57年
	オホーツク臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究 (4, 656. 60㎡)	平成18年4月
8 農生命科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践	平成12年4月	
9 グローバル連携センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力 連携	平成18年4月	
10 「食と農」の博物館 (東京都世田谷区上用賀2-4-28)	教育・研究の成果を広く社会に公開	平成16年4月	

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要

(農学研究科 生物資源開発学専攻 修士課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
農学研究科 共通科目	知的財産管理法	1前		2		○									兼1	集中	
	インターンシップ	2前		2				○	8							集中	
	小計 (2科目)	—	0	4	0	—	—	—	8	0	0	0	0		兼1		
専攻科目	基礎科目	論文英語	1前	1			○			8			1				
		研究倫理	1後	1			○			6			1				オムニバス
		プレゼンテーション法	1後		2				○	8			1				オムニバス
		生物多様性管理学概論	1前	2			○			4							オムニバス
		生物資源利用学概論	1前	2			○			4			1				オムニバス
	小計 (5科目)	—	6	2	0	—	—	—	8	0	0	1	0		兼0		
	特論科目	植物多様性学特論	1後		2		○			2							オムニバス
		昆虫学特論	1後		2		○			2							オムニバス
		野生動物学特論	1後		2		○			2							オムニバス
		薬用資源学特論	1後		2		○			1							
遺伝資源利用学特論		1後		2		○			1								
小計 (5科目)	—	0	10	0	—	—	—	8	0	0	0	0		兼0			
研究科目	生物資源開発学特別演習Ⅰ	1前	2					○	8								
	生物資源開発学特別演習Ⅱ	1後	2					○	8								
	生物資源開発学特別演習Ⅲ	2前	2					○	8								
	生物資源開発学特別演習Ⅳ	2後	2					○	8								
	生物資源開発学特別実験Ⅰ	1前	2						8								
	生物資源開発学特別実験Ⅱ	1後	2						8								
	生物資源開発学特別実験Ⅲ	2前	2						8								
	生物資源開発学特別実験Ⅳ	2後	2						8								
	小計 (8科目)	—	16	0	0	—	—	—	8	0	0	0	0		兼0		
合計 (20科目)			—	22	16	0	—	—	8	0	0	1	0		兼1		
学位又は称号		修士 (農学)		学位又は学科の分野				農学関係									
卒業要件及び履修方法								授業期間等									
【修了要件】 2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。 【履修方法】 必修科目22単位、選択必修科目2単位 (特論科目の中から主たる研究領域を選択)、選択科目6単位以上の合計30単位以上を修得すること。								1学年の学期区分				2期					
								1学期の授業期間				15週					
								1時限の授業時間				90分					

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

授 業 科 目 の 概 要				
(農学研究科 生物資源開発学専攻 修士課程)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
農学研究科共通科目	知的財産管理法	近年、農業分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい評価を創造していかうとする気運が高まっている。しかしながら、知的財産に関する法律は複雑で、独学での修得は困難である。そこで、農林水産分野の知的財産管理の専門家が、事例を交えながら解説し、理解させることを目的とする。	集中	
	インターンシップ	学生の将来のキャリア・プランに関連して、大学院在学中に一定期間を企業などで就学体験することによって、仕事の本質を理解し、さらなるキャリア・プランの構築を図るものである。本科目は、実際の職場において就業体験を積むことにより、自身の適性を認識し、職業観を深め、職業選択に役立たせることを目的とする。	集中	
専攻科目	基礎科目	論文英語	生物多様性と生物資源の保全および活用にに関する研究成果のほとんどは国際誌に英語論文で発表される。生物資源開発学の高度な専門知識を習得する上で、英語によって書かれた科学論文から最新の情報を的確に把握することは必須と言える。それに加え、世界の第一線の研究者による論文に触れることは、科学的議論の論理展開方法やその思考の過程を学ぶ貴重な機会と言える。本科目では英語によって書かれた科学論文を題材とし、世界水準の英語論文を正確に読み解けるようになることを到達目標とする。	
		研究倫理	<p>(概要)</p> <p>研究を行う上で、実験動物を取り扱いに関する生命倫理、実験・調査データの収集における法令遵守、公的研究費の適正な管理と執行方法などを理解することは極めて重要である。そこで本科目は研究に関わる倫理について様々な研究分野での注意点を例示しながら、研究者としての倫理観を涵養することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全8回：単位認定者 1 石川 忠)</p> <p>(1 石川 忠/1回)</p> <p>野外調査を行う上で理解しておかなければならない、種の保存法や外来生物法、ワシントン条約、または植物防疫法といった各種の法律や国際ルールを教授する。</p> <p>(2 小島 弘昭/2回)</p> <p>野外調査を行う調査地は、国や地方自治体含め必ず誰かの所有物であり、とくに特別保護地区や私有地に立ち入ったの調査には注意が必要である。許可申請から実際の調査までを実例を示して教授する。</p> <p>(3 佐々木 剛/1回)</p> <p>脊椎動物野外採集における鳥獣保護法、希少野生動物保護条例を踏まえた特別採捕許可の申請方法とその注意点等について具体的な事例をもとに教授する。</p> <p>(6 三井 裕樹/1回)</p> <p>生物多様性を確保するため、遺伝子組換え生物等を用いる際の規制措置を定めたカルタヘナ法、ゲノム編集技術を用いた農作物の取り扱いについて教授する。</p> <p>(7 山田 晋/1回)</p> <p>野外調査において、データや標本を正しい方法で記録あるいは記載し、必要な期間と方法を遵守した形で保管しておくことは、科学データの信頼性・再現性を担保するうえで極めて重要である。フィールドノートの記載方法や保管方法、標本の保管方法などについて教授する。</p> <p>(8 和久井 健司/1回)</p> <p>生物多様性条約の名古屋議定書が定める、遺伝資源の利用から生ずる利益の公正・衡平な配分(ABS)について講述し、利用国(者)が守るべきルールについて教授する。</p> <p>(9 倪 斯然/1回)</p> <p>動物実験は生命科学の進展や医薬品の開発等のために必要であるが、基本的に研究者が科学的合理性に基づくとともに、動物の愛護に配慮して立案しなければならない。動物福祉の基本概念と動物実験に関わる法律等を教授する。</p>	オムニバス方式

専攻科目	基礎科目	プレゼンテーション法	<p>プロGRESS発表や関連学会における口頭やポスターによるプレゼンテーションを行い、プレゼンテーションに必要な技能を身につける。修士論文等の研究成果を教員の指導のもとで取りまとめ、発表資料を作成し、研究に理解が得られるような発表内容に構成し、質疑に応じるといった一連の研究発表を実践する。これによりプレゼンテーション能力を高めるとともに口頭によるコミュニケーション能力も高めることができる。</p>	
		生物多様性管理学概論	<p>(概要) 農業生態系から自然生態系にいたる生物多様性に関わる知識と理解を基礎とし、生物資源の維持・管理として、昆虫ならびに野生種を含む動物、薬草を含む植物の生育・生息環境の保全に重点を置く。最新の研究事例を紹介しながら、保全と持続的な資源利用、とくに保全については生態系全体を俯瞰的に見る能力を養うための専門的知識を教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回： 単位認定者 5 松林 尚志)</p> <p>(1 石川 忠/4回) 昆虫類は地球上の全生物種のおよそ2/3を占める一大分類群である。その中から農業生態系や自然生態系に見られる昆虫類に着目して、種多様性を念頭に置いた昆虫学や分類学の理論と実践を教授する。</p> <p>(2 小島 弘昭/4回) 農業生態系と自然生態系の間には密接な関係が成り立っている。昆虫類を主とした節足動物とそれら生態系との関わりを、総合的害虫管理や総合的生態多様性管理の視点から教授する。</p> <p>(5 松林 尚志/4回) 生物多様性の管理には、生態系の理解が必要である。本講義では、とくに森林生態系を中心に生物間ネットワークの意義について教授する。</p> <p>(7 山田 晋/3回) 身近な植物群落は、その管理方法如何によって、望ましい姿にも望ましくない姿にも変わっていく。管理と植生変化との関係について、復元生態学や保全生態学に立脚した理論と実践を教授する。</p>	オムニバス方式
		生物資源利用学概論	<p>(概要) 農業生態系から自然生態系にいたる生物多様性に関わる知識と理解を基礎とし、生物資源の維持・管理として、野生種を含む動物、薬草を含む植物の生育・生息環境の保全に関する実践的知識を深める。さらに、生物資源の特性を適切に評価し、将来にわたって有効かつ持続可能な手法で利活用・開発するため、当該分野における最新の研究事例を紹介しながら、社会のニーズに即応できる能力を養うための専門的知識を教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回： 単位認定者 8 和久井 健司)</p> <p>(3 佐々木 剛/3回) 生物進化は多様性を生み出す原動力であり、動物が進化の過程で獲得した形質はあらゆる無駄を排除した究極の機能的器官といえる。動物の感覚器官の多様性とその機能について知識を教授するとともに生物資源としての価値とその資源利用の可能性を考究する。</p> <p>(4 松嶋 賢一/3回) 薬用植物の栽培に関する技術・手法および野生的薬用植物の栽培化に関する新たな育成管理法の開発を栽培学や植物整理生態学の理論や実践例を基に教授する。また、薬用植物の機能性に着目した多面的活用に関する新たな展開について見識を深める。</p> <p>(6 三井 裕樹/3回) 野生植物は各地の気候や土壌などの環境に適応し、多様な形態や機能を獲得した。野生植物の適応進化に関する研究を紹介し、環境への耐性等の機能を解析する手法、農業への応用について考える。</p> <p>(8 和久井 健司/3回) 栽培植物の新品種・近代品種の育成は、在来品種の形質利用の積み重ねの上に成立している。在来品種という遺伝資源の潜在的価値をいかに顕在化し、利活用していくかについて教授する。</p> <p>(9 倪 斯然/3回) 薬用植物を含む生薬は漢方薬に用いられ、風邪、頭痛、肩こりや冷えなどの病気の治療や、難病の対処や緩和ケアなど、幅広く貢献しており、また食品やサプリメント、化粧品などの分野にも応用されている。各分野における応用例を用い、薬用植物の品質評価、成分解析、作用メカニズム、副作用、生合成経路の解析などについて説明するとともに、最近の研究動向を紹介する。</p>	オムニバス方式

専攻科目	特論科目	植物多様性学特論	<p>(概要)</p> <p>人と自然が共生する社会を構築するために、自然環境を的確に読み取り、自然の保全・保護と持続的な利用を進めて行かなければならない。そのためには、自然環境における植物の多様性とその役割を理解したうえで、植物資源を有効適正に利用する必要がある。本講義では、植物群落構造や植物の成長量、植物が成長するための無機・有機物の循環、植物とその他の生物との相互作用に関する理論と解析手法を学ぶ。これらの知識により、多様な生物が相互に関係する調和のとれた自然環境の創出、管理、保全に関する研究の基盤を構築する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回：単位認定者：7 山田 晋) (6 三井 裕樹/7回)</p> <p>分子生物学、生理生態学的手法を用いて、植物の種および遺伝的多様性、形態、機能、植物と他の生物との相互作用を解析するための理論と実践法を教授する。</p> <p>(7 山田 晋/8回)</p> <p>植物生態学、植物社会学、植生学、復元生態学等の理論と実践例に基づき、野外植物群落の構造や多様性、植生の管理、復元に関する知識と手法を教授する。</p>	オムニバス方式
		昆虫学特論	<p>(概要)</p> <p>多様な昆虫類は特に農業と深いかかわりをもっている。古くから農業害虫として知られる種も多く、その制御は生産性の向上に欠かせない。その反面、有用昆虫も多く知られ、天敵やバイオミクリーとして利用される場合も少なくない。本科目は、研究者や技術者を目指す院生を対象として行う専門教育で、応用分野のみならず基礎分野も含めて、幅広く教授する。特に、基礎昆虫学の知識を教授した上で、農業上有害な昆虫の防除、有益な昆虫の利用、あるいは分類や生理・生態、分布といった生物本来の基本的課題に取り組むための知識を習得することを目的とする。これにより、昆虫学の基礎分野と応用分野について具体的な問題を取り上げ、それを解決するための方策を考え、提案することができる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回：単位認定者：2 小島 弘昭) (1 石川 忠/7回)</p> <p>種多様性に富む昆虫類には、多くのグループが含まれ、それゆえ形態的な多様性がとても高い。昆虫類に含まれるすべての目を対象に、分類学および形態学の理論と実践を、実例を多く交えて教授する。</p> <p>(2 小島 弘昭/8回)</p> <p>昆虫類は、長期にわたる種分化の歴史をもち、現在見られる種多様性に至った。これを念頭に置いて、多様な生態と農業上有害な昆虫の防除や有益な昆虫の利用を含む昆虫生態学、および分布データ活用法や生物系統学を発展させた系統生物地理学について教授する。</p>	オムニバス方式
		野生動物学特論	<p>(概要)</p> <p>野生動物の多様性を進化的歴史および現在の地球的規模での生態的多様性から理解することで、その資源的価値と保全管理することの重要性について講義する。本講義を履修することで野生動物学の体系に則った論理的思考ができるようになる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回：単位認定者：3 佐々木 剛) (3 佐々木 剛/8回)</p> <p>野生動物が自然状態で形成する集団の構造解明に関する知識を集団遺伝学の知見を元に教授し、その解析方法を講義する。加えて、集団分化から種分化がおこり、やがて進化へと通じる動物の多様化のメカニズムについて進化的生物学的観点から講義する。</p> <p>(5 松林 尚志/7回)</p> <p>生物多様性は生物間ネットワークによって維持されている。生物多様性の維持機構について群集生態学的観点から講義する。</p>	オムニバス方式
		薬用資源学特論	<p>薬用植物の栽培化は医薬品の原料となる生薬の安定確保に不可欠である。しかし、その栽培化には一般農産物とは異なる規格に応じた成育目標を有する。本科目では医薬品としての生薬の本質と、生薬の安定確保に係る薬用植物の栽培について生薬学・栽培学および植物生理生態学の観点から考究し、自ら成育目標を立て、増産に貢献できる能力を体得する。具体的には、薬用植物の生理生態的特性と栽培環境特性を複合した薬用植物の栽培理論を教授する。また、新たに栽培化を目指す薬用植物の成育目標を立案のための研究実践法を教授する。さらに、生薬の機能性に着目した多面的活用に関する基礎を講義する。</p>	
		遺伝資源利用学特論	<p>遺伝資源のもつ遺伝的多様性の顕在的および潜在的価値を認識し、国内外の植物在来品種における遺伝的多様性の評価と活用に関する知識と手法を教授する。さらに、遺伝資源を保全・管理していくことの重要性、遺伝資源の活用が人間生活にもたらす有用性、国内外における遺伝資源の探索・収集の取組みと国内への導入に関わる法規並びに実質的な手続きの必要性と意義について講義する。本講義を履修することで、遺伝資源を取り巻く様々な現状を体系的に理解し、将来に向けての遺伝資源利活用の展望を考察することができるようになる。</p>	

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別演習 I</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別実験 I と並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別演習 I～IVは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別演習 Iは、1年次前期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿ったテーマを決定し、研究計画書を作成することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学) 生薬の安定供給や伝統医療に有用な植物の発見・開発に寄与するため、さまざまな薬用植物の栽培・育成管理法の確立、有用系統の選抜、各種の生理生態学的特徴の解明などを行う。また、生薬の機能性の多面的活用に関する研究も遂行する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学) 植物の形態形成、環境応答のメカニズム解明に関する研究を行い、有用な農業形質を制御する技術開発への応用を目指す。本科目では、植物の形態形成や機能性に関する最新の研究事例を論文や書籍を用いて理解し、生理生態学的・分子生物学的研究手法、データ解析について実践的に学ぶ。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学) 植物遺伝資源の評価および利活用に関わる国内外の文献を熟読し、その内容を取り纏めるとともに、研究手法として、機器を用いた解析手法、計測データを用いた解析手法などについて原理や手法を学び、実践的な技術の習得を目指す。本科目を履修することにより、遺伝資源利用に関わる種々の課題を認識し、それらに対する実質的な解決に向けての手法を選択することができ、能動的な取組みができるようになる。</p>
--	----------------------	--

<p style="text-align: center;">研究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別演習Ⅱ</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別実習Ⅱと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別演習Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別演習Ⅱは、1年次後期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿って最新の知見や技術に関する情報の収集・検討に基づく、研究のテーマと計画の最適化である。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠(指導教員))(昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭(指導教員))(昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛(指導教員))(野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様性を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一(指導教員))(薬用資源学) 生薬の安定供給や伝統医療に有用な植物の発見・開発に寄与するため、さまざまな薬用植物の栽培・育成管理法の確立、有用系統の選抜、各種の生理生態学的特徴の解明などを行う。また、生薬の機能性の多面的活用に関する研究も遂行する。</p> <p>(5 松林 尚志(指導教員))(野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹(指導教員))(植物多様性学) 植物の形態形成、環境応答のメカニズム解明に関する研究を行い、有用な農業形質を制御する技術開発への応用を目指す。本科目では、植物の形態形成や機能性に関する最新の研究事例を論文や書籍を用いて理解し、生理生態学的・分子生物学的研究手法、データ解析について実践的に学ぶ。</p> <p>(7 山田 晋(指導教員))(植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司(指導教員))(遺伝資源利用学) 植物遺伝資源の評価および利活用に関わる国内外の文献を熟読し、その内容を取り纏めるとともに、研究手法として、機器を用いた解析法、計測データを用いた解析法などについて原理や手法を学び、実践的な技術の習得を目指す。本科目を履修することにより、遺伝資源利用に関わる種々の課題を認識し、それらに対する実質的な解決に向けての手法を選択することができ、能動的な取組みができるようになる。</p>	
---	---------------------	---	--

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別演習Ⅲ</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別実験Ⅲと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別演習Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別演習Ⅲは、2年次前期に履修させる。到達目標は、指導課題に沿って決定した研究テーマで修士論文の骨子の作成である。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学) 生薬の安定供給や伝統医療に有用な植物の発見・開発に寄与するため、さまざまな薬用植物の栽培・育成管理法の確立、有用系統の選抜、各種の生理生態学的特徴の解明などを行う。また、生薬の機能性の多面的活用に関する研究も遂行する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学) 植物の形態形成、環境応答のメカニズム解明に関する研究を行い、有用な農業形質を制御する技術開発への応用を目指す。本科目では、植物の形態形成や機能性に関する最新の研究事例を論文や書籍を用いて理解し、生理生態学的・分子生物学的研究手法、データ解析について実践的に学ぶ。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学) 植物遺伝資源の評価および利活用に関わる国内外の文献を熟読し、その内容を取り纏めるとともに、研究手法として、機器を用いた解析法、計測データを用いた解析法などについて原理や手法を学び、実践的な技術の習得を目指す。本科目を履修することにより、遺伝資源利用に関わる種々の課題を認識し、それらに対する実質的な解決に向けての手法を選択することができ、能動的な取組みができるようになる。</p>	
--	---------------------	---	--

研究科目	生物資源開発学特別演習Ⅳ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別実験Ⅳと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別演習Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別演習Ⅳは、2年次後期に履修させる。到達目標は、修士論文の完成と成果の発表である。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学)</p> <p>昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学)</p> <p>昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学)</p> <p>多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学)</p> <p>生薬の安定供給や伝統医療に有用な植物の発見・開発に寄与するため、さまざまな薬用植物の栽培・育成管理法の確立、有用系統の選抜、各種の生理生態学的特徴の解明などを行う。また、生薬の機能性の多面的活用に関する研究も遂行する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学)</p> <p>国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学)</p> <p>植物の形態形成、環境応答のメカニズム解明に関する研究を行い、有用な農業形質を制御する技術開発への応用を目指す。本科目では、植物の形態形成や機能性に関する最新の研究事例を論文や書籍を用いて理解し、生理生態学的・分子生物学的研究手法、データ解析について実践的に学ぶ。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学)</p> <p>二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学)</p> <p>植物遺伝資源の評価および利活用に関わる国内外の文献を熟読し、その内容を取り纏めるとともに、研究手法として、機器を用いた解析法、計測データを用いた解析法などについて原理や手法を学び、実践的な技術の習得を目指す。本科目を履修することにより、遺伝資源利用に関わる種々の課題を認識し、それらに対する実質的な解決に向けての手法を選択することができ、能動的な取組みができるようになる。</p>	
------	--------------	---	--

研究科目	生物資源開発学特別実験 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別演習 I と並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別実験 I～IVは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別実験 Iは、1年次前期に履修させる。到達目標は、生物資源開発学特別演習 I で組み立てた研究テーマを推進していくための実験方法を身につけるための予備実験または予備調査を行うことである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学)</p> <p>昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学)</p> <p>昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学)</p> <p>多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化 (種分化) することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様性を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学)</p> <p>生薬の安定生産や伝統医療に有用な植物の発見・開発に不可欠である薬用植物の栽培技術や研究手法を取得するため、発芽、土壤環境整備、施肥、病虫害・雑草管理、植物生理、加工・調整、品質評価、系統選抜等の研究の具体的手法を指導する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学)</p> <p>国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学)</p> <p>植物の成長を支える根や葉の形態形成、環境に応答して調整される開花のメカニズム等に関する生理生態学的・分子生物学的研究手法を学ぶ。組織、細胞レベルでの形態解析、遺伝子発現、タンパク質、代謝産物を解析する技術を習得する。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学)</p> <p>二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学)</p> <p>遺伝資源の有する様々な遺伝形質を活用するため、在来品種から有用な形質を見出し、遺伝的、組織学のおよび成分的な特徴付けを進めるための実験手法を身につけ、植物育種のための基盤構築を図る。さらに、新たな系統・品種育成への応用的利用に向けた着目形質解析のための集団育成、当該集団を利用した分子マーカーの探索・開発及び分子生物学的機構解明を目指す。</p>
------	---------------	--

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別実験Ⅱ</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別演習Ⅱと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別実験Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別実験Ⅱは、1年次後期に履修させる。到達目標は、遂行中の実験または調査に加え、生物資源開発学特別演習Ⅱの結果、新たに必要になった追加実験または調査を行うことである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学) 生薬の安定生産や伝統医療に有用な植物の発見・開発に不可欠である薬用植物の栽培技術や研究手法を取得するため、発芽、土壌環境整備、施肥、病害虫・雑草管理、植物生理、加工・調整、品質評価、系統選抜等の研究の具体的手法を指導する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学) 植物の成長を支える根や葉の形態形成、環境に応答して調整される開花のメカニズム等に関する生理生態学的・分子生物学的研究手法を学ぶ。組織、細胞レベルでの形態解析、遺伝子発現、タンパク質、代謝産物を解析する技術を習得する。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学) 遺伝資源の有する様々な遺伝形質を活用するため、在来品種から有用な形質を見出し、遺伝的、組織学および成分的な特徴付けを進めるための実験手法を身につけ、植物育種のための基盤構築を図る。さらに、新たな系統・品種育成への応用的利用に向けた着目形質解析のための集団育成、当該集団を利用した分子マーカーの探索・開発及び分子生物学的機構解明を目指す。</p>	
--	---------------------	--	--

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別実験Ⅲ</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別演習Ⅲと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の、計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別実験Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別実験Ⅲは、2年次前期に履修させる。到達目標は、遂行中の実験または調査に加え、必要な本実験または本調査を行うこととする。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠(指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭(指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛(指導教員)) (野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一(指導教員)) (薬用資源学) 生薬の安定生産や伝統医療に有用な植物の発見・開発に不可欠である薬用植物の栽培技術や研究手法を取得するため、発芽、土壌環境整備、施肥、病害虫・雑草管理、植物生理、加工・調整、品質評価、系統選抜等の研究の具体的手法を指導する。</p> <p>(5 松林 尚志(指導教員)) (野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹(指導教員)) (植物多様性学) 植物の成長を支える根や葉の形態形成、環境に応答して調整される開花のメカニズム等に関する生理生態学的・分子生物学的研究手法を学ぶ。組織、細胞レベルでの形態解析、遺伝子発現、タンパク質、代謝産物を解析する技術を習得する。</p> <p>(7 山田 晋(指導教員)) (植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司(指導教員)) (遺伝資源利用学) 遺伝資源の有する様々な遺伝形質を活用するため、在来品種から有用な形質を見出し、遺伝的、組織学および成分的な特徴付けを進めるための実験手法を身につけ、植物育種のための基盤構築を図る。さらに、新たな系統・品種育成への応用的利用に向けた着目形質解析のための集団育成、当該集団を利用した分子マーカーの探索・開発及び分子生物学的機構解明を目指す。</p>
--	---------------------	---

<p style="text-align: center;">研 究 科 目</p>	<p>生物資源開発学特別実験Ⅳ</p>	<p>(概要) 本専攻では、様々な生物の生育・生息環境の保全、生物資源の持続可能な利活用や開発にかかわる課題について、生物多様性の知識を基盤として研究する。そのため、生物資源開発学特別演習Ⅳと並行して、昆虫学、野生動物学、植物多様性学、薬用資源学、遺伝資源利用学の5つの研究室の指導教員が、修士論文の作成に必要な研究の計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。生物資源開発学特別実験Ⅰ～Ⅳは修士論文が完成するまでのプロセスを4段階に分ける。生物資源開発学特別実験Ⅳは、2年次後期に履修させる。到達目標は、研究内容を精査し、不足の実験または調査を行うとともに、再現性を確認することである。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 石川 忠 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち半翅目を主とした不完全変態類を中心に、分類学・形態学上の問題を解決する。とくに、解剖技術、形質評価、同定法、命名法、分子系統解析を修得させることによって、昆虫類の種多様性を解明することを目指す。</p> <p>(2 小島 弘昭 (指導教員)) (昆虫学) 昆虫類のうち鞘翅目を主とした完全変態類を中心に、比較形態学・系統生物地理学上の問題を解決する。とくに、系統分類、種分化、分布形成、寄主選択などの理論と実践を修得させることによって、応用昆虫体系学の確立へ向けた諸問題の解明を目指す。</p> <p>(3 佐々木 剛 (指導教員)) (野生動物学) 多様な脊椎動物を題材に多様性を獲得するに至った歴史的背景および遺伝的要因の解明を分子レベルで明らかにすることを目指す。野生動物は集団内に遺伝的変異を維持しながら集団を形成し、環境変動や分布拡大によって集団が分化(種分化)することで進化を遂げた。このプロセスにおける系統分化の歴史を中立的な分子進化を指標とした解析で明らかにするとともに、機能的遺伝子の多様を明らかにすることで環境への適応の要因を探る。さらに機能的形態の発生遺伝学的解析からその出現に至った分子メカニズムを探り、生物多様化の遺伝的要因を明らかにする。</p> <p>(4 松嶋 賢一 (指導教員)) (薬用資源学) 生薬の安定生産や伝統医療に有用な植物の発見・開発に不可欠である薬用植物の栽培技術や研究手法を取得するため、発芽、土壌環境整備、施肥、病害虫・雑草管理、植物生理、加工・調整、品質評価、系統選抜等の研究の具体的手法を指導する。</p> <p>(5 松林 尚志 (指導教員)) (野生動物学) 国内外の野生動物の生息環境で起きている諸問題を俯瞰し、とくに生態学視点から問題の発生原因の共通性や固有性を抽出し、その解決策を探る。</p> <p>(6 三井 裕樹 (指導教員)) (植物多様性学) 植物の成長を支える根や葉の形態形成、環境に応答して調整される開花のメカニズム等に関する生理生態学的・分子生物学的研究手法を学ぶ。組織、細胞レベルでの形態解析、遺伝子発現、タンパク質、代謝産物を解析する技術を習得する。</p> <p>(7 山田 晋 (指導教員)) (植物多様性学) 二次的自然の保全や復元に関する世界の動向を、国際的論文を網羅的に読み込むことによって把握し、現状の問題点を探る。野外生物データの分析・解析方法を学ぶ。以上から、植物の有する生態的機能や種の保全に関する新知見を得る。</p> <p>(8 和久井 健司 (指導教員)) (遺伝資源利用学) 遺伝資源の有する様々な遺伝形質を活用するため、在来品種から有用な形質を見出し、遺伝的、組織学および成分的な特徴付けを進めるための実験手法を身につけ、植物育種のための基盤構築を図る。さらに、新たな系統・品種育成への応用的利用に向けた着目形質解析のための集団育成、当該集団を利用した分子マーカーの探索・開発及び分子生物学的機構解明を目指す。</p>	
--	---------------------	--	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

学校法人東京農業大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和3年度		令和4年度		変更の事由	
入学 定員	編入学 定員	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
14	—	14	—	28	
12	—	12	—	24	
—	—	10	—	20	専攻の設置(届出)
—	—	8	—	16	専攻の設置(届出)
10	—	0	—	0	令和4年4月学生募集停止
5	—	5	—	15	
4	—	4	—	12	
3	—	3	—	9	
30	—	30	—	60	
20	—	20	—	40	
20	—	20	—	40	
6	—	6	—	12	
5	—	5	—	15	
2	—	2	—	6	
3	—	3	—	9	
2	—	2	—	6	
30	—	30	—	60	
20	—	20	—	40	
20	—	20	—	40	
5	—	5	—	15	
8	—	8	—	16	
8	—	8	—	16	
10	—	10	—	20	
6	—	6	—	12	
2	—	2	—	6	
2	—	2	—	6	
2	—	2	—	6	
18	—	18	—	36	
8	—	8	—	16	
10	—	10	—	20	
7	—	7	—	14	
2	—	2	—	6	
2	—	2	—	6	
2	—	2	—	6	

生物産業学研究科			
生物生産学専攻(M)	7	—	14
アグアバイオ学専攻(M)	5	—	10
食品香粧学専攻(M)	5	—	10
産業経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	326		701

生物産業学研究科			
北方圏農学専攻(M)	7	—	14
海注水産学専攻(M)	5	—	10
食香粧化学専攻(M)	5	—	10
自然資源経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	334		717

東京農業大学			
農学部		3年次	
農学科	170	—	680
動物科学科	140	—	560
生物資源開発学科	125	—	500
デザイン農学科	123	—	492
応用生物科学部		3年次	
農芸化学科	150	—	600
醸造科学科	150	—	600
食品安全健康学科	150	—	600
栄養科学科	120	—	480
生命科学部		3年次	
バイオサイエンス学科	150	—	600
分子生命化学科	130	—	520
分子微生物学	130	—	520
地域環境科学部		3年次	
森林総合科学科	130	—	520
生産環境工学	130	—	520
造園科学科	130	—	520
地域創成科学科	100	—	400
国際食料情報学部		3年次	
国際農業開発学科	150	—	600
食料環境経済学科	190	—	760
国際バイオビジネス学科	150	—	600
国際食農科学科	110	—	440
生物産業学部		3年次	
北方圏農学科	91	—	364
海洋水産学科	91	—	364
食香粧化学科	91	—	364
自然資源経営学科	90	—	360
計	2,991	—	11,964

東京農業大学			
農学部		3年次	
農学科	170	—	680
動物科学科	140	—	560
生物資源開発学科	125	—	500
デザイン農学科	123	—	492
応用生物科学部		3年次	
農芸化学科	150	—	600
醸造科学科	150	—	600
食品安全健康学科	150	—	600
栄養科学科	120	—	480
生命科学部		3年次	
バイオサイエンス学科	150	—	600
分子生命化学科	130	—	520
分子微生物学	130	—	520
地域環境科学部		3年次	
森林総合科学科	130	—	520
生産環境工学	130	—	520
造園科学科	130	—	520
地域創成科学科	100	—	400
国際食料情報学部		3年次	
国際農業開発学科	150	—	600
食料環境経済学科	190	—	760
国際バイオビジネス学科	150	—	600
国際食農科学科	110	—	440
生物産業学部		3年次	
北方圏農学科	91	—	364
海洋水産学科	91	—	364
食香粧化学科	91	—	364
自然資源経営学科	90	—	360
計	2,991	—	11,964

東京情報大学 総合情報学部 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

↑

東京情報大学 総合情報学部 総合情報学科 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

↑